2022年6月19日 礼拝メッセージ

聖書:列王記第二1章1～18節

説教:イスラエルには神はいないのか

はじめに

今日からしばらく第二列王記を見てまいります。本文に入る前に、イスラエルの歴史を簡単に振り返っておきます。ダビデが紀元前千年頃にイスラエルを一つの国としてまとめ上げ、ダビデの死後その子ソロモンが跡をを継ぎ、イスラエルの歴史上最も繁栄した時代を迎えます。ところがソロモンが亡くなると、それまでたまっていた問題が吹き出し、北王国イスラエルと南王国ユダに分裂し、異教の神々を拝むようになっていきます。もちろん神は黙ってはいません。預言者をなんども遣わし警告する。けれども多くの王たちは心を頑なにして従おうとしない。列王記には、そのようなイスラエルの歴史が事細かに描かれています。

第一列王記22章の最後のところでは、北王国イスラエルの七代目の王であったアハブが亡くなった後、八代目の王として彼の息子であるアハズヤが立ち、彼は異教の神々であったバアルに仕え、それを拝み、イスラエルの神、主の怒りを引き起こしたと書かれています。

今日のところでは、そのアハズヤがしたことを見ながら神の救いについて考えてまいります。

１　アハズヤ

１）バアル・ゼブブに伺いを立てる

アハズヤが王座に就いてまだ日も浅い頃、彼は屋上の部屋の欄干から落ちてしまい、いのちに関わる怪我を負ってしまいます。そこで彼は部下にこう命じます。2節後半。「彼は使者たちを遣わし、『行って、エクロンの神、バアル・ゼブブに、私のこの病が治るかどうか伺いを立てよ』と命じた。」

バアル・ゼブブがどのような神であったのかは詳しいことは分かっていません。アハズヤは、バアル・ゼブブから霊験あらたかなことばをいただければ怪我が治るかもしれない、そう考えたようなのです。

これは日本とよく似ています。ネットを調べてみると、「健康に御利益がある神社20選」というのがありました。歴史が古いか、由緒や言い伝えが詳しくわかっているか、知名度、つまり有名人が参拝しているというような情報です、そうれらをポイントにして高い順からランキングしていました。まだ聖書の神を知らなかった時に、そういうところに行って祈願していたという方も多いでしょう。

これにならえば、アハズヤはバアル・ゼブブ神社に参拝してもらおうと思ってに自分の代わりに使者を送ったということです。ところがその使者がすぐに戻ってきた。不審に思ったアハズヤが尋ねると彼らはこう答えた。6節。「ある人が私たちに会いに上って来て言いました。『自分たちを遣わした王のところに帰って、彼にこう告げなさい。主はこう言われる。あなたが人を遣わして、エクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てるのは、イスラエルに神がいないためか。それゆえ、あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。』」

いったいそんなこんなことを語ったのは誰なのか。使者たちが、かくしかじかこう言う格好をしていたと告げると、アハズヤはその男が預言者エリヤであると直感します。どうしてアハズヤはエリヤを知っていたのか。

２）父アハブの時にあったこと

父アハブがまだ健在だったときのことです。アハブは自分の宮殿のすぐ近くにあるぶどう畑が欲しくなり、持ち主であるナボテにそれを売って欲しいと交渉する。ところがナボテは「先祖のゆずりの地を売ることはできない」と言って断る。それでアハブは妻のイゼベルにそそのかされて、計略を巡らし、無実の罪を無理矢理に着せ、石打ちにして殺し、畑を強引に奪い取ってしまいます。これを見たエリヤは神のことばとして、アハブにこう告げる。「今わたしは、あなたにわざわいをもたらす。わたしはあなたの子孫を除き去り、断ち滅ぼす。」（一列王記21章21節）

これを聞いたアハブは自分の罪を悲しみ、粗布をまとって首をうなだれながら歩く。神はこのようなアハブをご覧になり、エリヤを通して、「彼が生きている間はわざわいを下さない。しかし、彼の子の時代に、彼の家にわざわいを下す」と言われました。アハズヤは、おそらくこのとき預言者エリヤの姿を見て知っていたのでしょう。それですぐにわかった。

いずれにせよ、アハズヤが屋上から落ちて瀕死の重傷を負ったのは、アハズヤ自身が異教の神を拝ん

でいたこともありますが、父アハブの時に犯した罪のためだった。そういうことになります。

３）疑問

ここで疑問が湧いてきます。自分が犯した罪によって自分自身がさばかれるのなら、まだ納得できる。しかし、先祖や父親が犯した罪によってその子孫がさばかれるとしたらどうですか。先祖や親たちが犯した罪など自分には関係ないと言いたくても、そこから逃れられないというのです。そうしたら、今自分がこんなひどい事故に遭ったのは、先祖のたたりだった、ということになる。今自分がこんな病気にかかったのは親の犯した罪の報いということになる。これは大変なことです。どこかの神社に行ってお祓いしたくなる。それがだめだというのなら、私たちの救いはどこにあるのでしょう。もちろん、ちゃんと救いがあります。

２　預言者エリヤ

１）イスラエルには神がいないのか

アハブが遣わした最初の使者に、預言者エリヤが語ったことばをもう一度読みます。「自分たちを遣わした王のところに帰って、彼にこう告げなさい。主はこう言われる。あなたが人を遣わして、エクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てるのは、イスラエルに神がいないためか。それゆえ、あなたは上ったその寝台から降りることはない。あなたは必ず死ぬ。」

これを読んで、誰もが「これは神のさばきのことばだ」と思ったでしょう。しかし、よく考えてください。もし神のさばきが最初から決まっていて、絶対に変更されることはないというのなら、どうしてわざわざエリヤを遣わして、このようなことばを語るのでしょうか。それも一度ではない。最初の使者たちにと、直接アハズヤ王に対してと、二度にわたってほぼ同じことばを語る。さばくことが決まっているのなら、こんな面倒なことはしなくてよい。何か意味があるはずです。

２）思い直される神

この問題を解く鍵はどこにあるか。私たちはなにか思い違いをしていたのではないか。神は必ず罪をさばく。それは正しい。では、さばくと決めたなら絶対に変更されないのか。いいえ、神は思い直してさばきを取り下げることがある。そう考えてみたらどうでしょうか。

実例がちゃんとある。父アハブのことを思いだしてください。最初にも触れました。彼がナボテを合法的に殺して畑を自分のものにしたとき、エリヤはさばきのことばを語ったら、アハブは自分がしたことを悔いて粗布をまとってうなだれて歩き出した。それをご覧になった神は、アハブに対するさばきを思い直した。神は思い直すことがあるのです。アハズヤにも同じことが起こる可能性があったのではないですか。アハズヤが悔い改めて主に立ち戻ることを期待して、それでわざわざエリヤを遣わした。そう考えることができます。

３）三回派遣された五十人隊

では五十人隊のことはどう考えるべきなのか。今日の箇所を読んで皆さんがもっとも驚くのは、彼らの身に起きたことでしょう。最初に派遣された五十人隊の隊長はエリヤにこう呼びかけます。9節。「神の人よ、王のお告げです。下りて来てください。」しかし天から火が下って来て、焼き尽くされてしまう。続いて二度目に派遣された隊長はこうエリヤに呼びかける。11節。「神の人よ、王がこう言われます。急いで下りて来てください。」

火で焼き尽くしてしまうのは残酷だという意見もあります。しかし、二人の隊長がともに「王のお告げです」と言っていることに注意してください。神の人エリヤは、王の命令に従うべきだと言っているのです。神の前にへりくだる気持ちはまったくありません。それで火で焼かれてしまった。三度目に派遣された隊長が火で焼かれずに無事だったのは、彼がエリヤの前にひざまずき、こう言ったからでした。13節後半。「神の人よ、どうか私のいのちと、このあなたのしもべ五十人のいのちをお助けください。」神の前にへりくだったので助かった。

これでおわかりでしょう。神はいつまでも怒る方ではない。へりくだる者にはわざわいを思い直して、救い出そうとされるのです。バアル・ゼブブ神社に参拝させるために使者が立てられた時、なぜエリヤは警告のことばを語ったのか。三度目の五十人隊が派遣されてきた時、なぜエリヤは彼らと一緒にアハズヤ王のところに出向き、神のことばを語ったのか。神はアハズヤに神にへりくだるチャンスを与えて、救おうとされているから。アハズヤがそのとき、もし自分の罪を悔い改めて、イスラエルには万物を創造されたただお一人の神がおられると信じる事ができたなら、彼は救われたはずです。死ぬことはなかった。おそらく怪我も治り、健康なからだにさえなったかだろうと思います。しかし彼は頑なでした。三度も五十人隊を送って、エリヤを殺そうとします。それでも、エリヤが王の前

に出向いてきた時、最後のチャンスはあった。しかし彼は悔い改めず、神にそむき、結局自分の手で神のさばきを引き寄せてしまうことになります。

３　イエス・キリスト

父アハブがそうだったように、どんなひどい罪でもその罪を認めて悔いて悲しむなら、神はその者をあわれみ、救ってくださる。それは大きな恵みです。しかしそこで終わってはいけません。私たちに対するさばきを思い直し、赦された罪はどうなるのでしょう。神は忘れるのでしょうか。水に流すのでしょうか。決してそんなことはありません。罪は罪としてさばかなければならない。どうやってさばくのか。イエス・キリストが私たちの罪をすべて背負われて十字架でさばかれました。

この方は今どこにおられのでしょう。エリヤは語りました。「あなたが使者たちをエクロンの神、バアル・ゼブブに伺いを立てに遣わしたのは、イスラエルにみことばを伺う神がいないためか。」

イスラエルの神、イエス・キリストは、いま私たちとともにいてくださいます。どんなことがあろうとも、私たちはこの方の十字架に立ち戻りたいと願います。